

## 仏になる道

鳶が輪をえがいて足許を廻つておる。

叡山の山路、小岩に腰掛けた、蓮長と浄念との話はずきない。

「宗旨が沢山ある理屈はそれでわかつたとして、仏様がごちやごちやと沢山あることについて、どうお考えになりますか」

と浄念が話をつづけた。

「仏様がたくさんあるのは立派な根拠があるのですが、一番悪いことは、おがむ方が、自分のひくい心持を主にして、すき勝手に仏像をえらび出しするのが、色々な混乱をよび起しておる原因ですよ。わしは不動様のどんなものにも屈しない、あの形貌が気に入ったとか、わたしは観音様のあのやさしさが好きだとか、みな自分の心持を主にしておがむのがいけないのです。仏様を愛玩品にしておる。観音や不動をおがむ場合は、非常にひくい自分勝手な欲望をもととしておがんでいると言うてもさしつかえがない。ですから、不動様をおがむ人は観音様をみとめない、観音

に熱心な人は不動様を全然ありがたがらない。互に相手を否定しあっております。そして、観音にも不動にも心を動かさない人からみれば、両方ともなんらの価値がないということになります。こうなると、また、なんにも信じない人というのもいてよい訳になります」

「その話の調子では、無宗教の人達が仏教がそだてておるような理窟になりますなあ、これは面白い論だ、無宗教の徒を仏教が養成するというのが言い過ぎならば、すくなくとも、無仏の徒を僧侶が肯定することになりますよ、それでは坊主は商売になりませんぞ」

「まあまあ論は後にして、先ずお聞きなさい。三百年にもわたる叡山と山下園城寺の兵器をとつてまでの闘争をなんとみますか、叡山はわが山の仏を尊しとなして園城寺の仏を下す、園城の僧徒は、叡山の寺塔すべてを焼払つても、敢て仏罰を恐れぬ、互いに相手を否定しあつておる。こうなると、これに関係のない人は、無宗教に安住するのは当然の理ではありませんか。僅かに道念のある僧侶が山をおりて、自分の意にあつた経文、自分の愛玩する仏像によつて、各自勝手に宗派をたてておる」

「なる程、法然上人は九年間、栄西禪師は十四年間、親鸞上人は十九年間と、みな長い間、この叡山で修行せられたが、三人とも山をおりて一宗を立てられております。叡山にはもはや伽藍のみあつて、仏の正意は山法師にふみつぶされてしまったのでしうか」

「さりとて、山をおりて、宗旨を立てておる人達が、仏の正意に適うものとも思われません」

「それは何故ですか」

「仏の正意が、そういくつもある筈がないからです、仏の正意はただ一つだけだと思います。天には一日、国には一人の王ときまつておるではありませんか。」

一体、仏様とは如何なるものでしょうか、仏はなんによつて仏になられたのか、仏は仏をおがんだだけで仏様にはなっていない。

仏の教えをきき、それを悟り、それを実行せられた方が、仏になったのです。だから仏様はいくらでもおる訳です。三世十方の諸仏と言う位沢山の仏様がおられますが、これはおられるのが当然です。おられなければ却つて不思議と言わねばなりません。仏の教の実行者ですから、沢山おるのが当然です。しかしながら、その諸仏の行動所説は、仏になつてからは異なる所もあるでしょうが、仏になるといふ教については、等しく同じでなければなりません。即ち一つの法があつて、それを悟つた人々が仏になつた。仏様の教だけ法があるのではありません。諸仏は縁による法のあらわれ方であります。この一法こそ、仏の正意です。

現在日本の仏教は、その法を悟り実行した、いろいろな仏様達を飾りたてておがんでおるにすぎません。

ご馳走をたべた人の話をきいていても腹は一杯になりません。仏になる道は、仏の歩いてきた道を、あるく以外にはないはずですが、しかしながら誰もその道を歩かないで、諸仏成仏道の見聞

記たる経文を暗誦しておるにすぎません。故に一仏を得れば、徒らに他仏を否定する、せまい量見になります。諸仏をあらしめた、その法を私達は会得すべきだと思ひます」

「なんとまた変つた考え方でしよう、私などはお経の読み方を習うだけで、そんな話は聞いたことも、考えたこともありません」

「淨念殿、この叡山に住んでいて、そんな低い考え方をもつてはいけませんぞ、雲は足許に湧き、鳥は脚下をまおつておるのではありませんか」

みれば夜気がせまつてきたのか、比叡の谷々からは霧が生きものの如く湧き上がってくる。ねぐらに帰る鳥の群であろうか、銀盤のような琵琶湖の上に黒い影をとどめている。まことに脚下の景観は悠々たるものがあつた。

「この山上に居る間は私達は上を望み見なければなりません。それが修行ですよ、出来上つた金びかの仏様をおがんでいただけでは、到底成仏を期す訳にはいきません、仏になるべき秘法を会得して、自らも仏にならなければ、下化衆生なぞ思いもありません。

出来上つた金びかの仏様を飾りたてて、さあさあおがみなさいと商錢をかせぐのが、近頃の新興仏教ですよ、おがんだだけ、賽錢を上げただけでは成仏はしませんぞ。要は実行ですよ、おかしなもので、賽錢を上げたりおがんだりだけしておる人が、何時の間にかその教えを実行しておるような錯覚を起してしまうのですよ。そのような人が一杯になつた時は仏教が亡びる時です。

在家もお経廻りをするこまめな坊さんだけを珍重して、こつこつと勉強し、求道にもえる僧侶をありがたがらない、これでは仏教はおしまいです。なぜ、このような時代になったのか、浄念殿、貴殿は大集経を読んだことがありますか」

「そのような名前のお経など読んだことはありません、どう言うお経ですか」

「それを読むと、何故今のような時代がきたか、その理由がはっきりとわかりますよ、この今の時代こそ釈尊が予言をしておいた時代なのです」

